

## 6. 島原天草一揆と近世秩序(2)―近世人の一揆認識

2025. 5.23. 大橋 幸泰

### はじめに

島原天草一揆／混成集団としての一揆勢

\*キリシタンという神威で正当性を帯びた集団

→島原天草一揆はどのように終結し、その後、近世人にどんな影響を及ぼしたか？

### 1. キリシタン一揆で終わらなかった島原天草一揆

幕府軍(総大将松平信綱)の原城攻撃／兵糧攻め

→この間、非キリシタンへの投降勧告(史料1)、四郎の親族と非キリシタンとの入れ替えを画策

\*松平信綱はキリシタン一揆で終わらせなかった／すべてキリシタンの責任に転嫁できる

→しかし、一揆指導者は混成集団であること自体を否定、非キリシタンの解放を拒否

→最後まで、キリシタンとして命運を決することを表明(史料2)

→幕府軍の総攻撃／結果として、混成集団としての一揆勢をキリシタンとして殺戮(史料3)

\*「とがなきものを御果し被成候事、天下御仕置に相違申候」(史料4)は現実のものに

### 2. キリシタンの一揆から百姓の一揆への転回

幕藩権力、最後までキリシタン一揆として認識(史料5)

→混成集団としての一揆勢を殺戮したという現実を、幕府はどう説明するか？

→一揆後、一揆の原因に対する幕府の公式見解として、領主苛政が浮上(史料6)

→島原藩(藩主松倉重次)・唐津藩(藩主寺沢堅高)の苛政に責任転嫁／以後、時代の経過とともに定着

\*たとえば、『徳川実紀』(史料7)、『嶋原記』(仮名草子)(史料8)、など

→島原天草一揆の一揆物語では、一揆の仕置後、安定した世の中になったとして、幕府の治世を称賛(史料8・9)

\*領主苛政は、もちろん実態としてもあった(史料10)

→領主全般に対して「明君」たるべきことを要求

\*領主(松倉重次・寺沢堅高)に対する処分の重さ／近世期を通じて領主と百姓の間の緊張関係を保持

### 3. 島原天草一揆の記憶の継承

近世人にとって、「一揆」とは島原天草一揆をイメージ

→典型的な百姓一揆(17C中～18C後)の史料／その事件を表す語として「一揆」は登場しない

領主／「一揆」が起きたことを認めれば、自分は「仁君」「明君」でないことを認めたことになる

百姓／自分たちの行動が「一揆」であることを認めれば、公儀の「御百姓」を「成立」たせる「仁政」の回復を求めるといった正当性が失われる

→領主も百姓も、これは島原天草一揆のような事件ではないことを強調

島原天草一揆の基本的性格は宗教戦争で経済問題はきっかけにすぎない、との評価は、島原天草一揆が仁政イデオロギーの形成に大きな影響を与えたという事実と矛盾

#### 4. 島原天草一揆はどのように認識されたか？

経済問題と宗教問題／この一揆を認識しようとする者を取り巻く社会情勢によって、認識の軸足が変わる

一揆中／キリシタンへの脅威→キリシタン禁制への不満から起こったという認識が先行

一揆後／仁政イデオロギーの定着→領主苛政への不満から起こったという認識がより強調

→だからといって、一揆後、近世期を通じてこの一揆は「切支丹」という「邪教」が起こした一揆であるとの認識が消えたわけではない

\* 「切支丹」邪教観とともに、領主苛政をセットに語り継がれる(史料 11・12)

→経済問題と宗教問題は、島原天草一揆を引き起こした両輪

\* どちらかが主でどちらかが従という関係ではない

→島原天草一揆は、経済問題・宗教問題の両方の意味で、近世期を通じて治者・被治者の間の仁政観の共有に大きな影響を与えた

\* 仁政の中身／「百姓成立」の保証と「切支丹」の排除

#### おわりに

現代人の島原天草一揆認識

戦後歴史学／皇国史観の克服を目指して、社会経済史を重視

→経済的収奪が原因

現代歴史学／マルクス主義の影響の減退(進歩史観への懐疑)から、宗教問題への関心高揚

→宗教問題が原因

\* 島原天草一揆は経済闘争か？宗教戦争か？、という二項対立的問いそのものを疑う必要がある

「島原の乱」という呼称

→史料上「一揆」という語句で呼ばれる／この事件は、近世人にとって「一揆」そのもの

\* 「島原天草一揆」の呼称がもっとも自然であり、適切ではないか

#### 【参考文献】

鶴田倉造 編『原史料で綴る 天草島原の乱』(本渡市、1994年)

深谷克己『百姓成立』(塙書房、1993年)

保坂 智『百姓一揆と義民の研究』(吉川弘文館、2006年)

保坂 智『百姓一揆とその作法』(吉川弘文館、2002年)

神田千里『島原の乱』(中央公論新社 [中公新書]、2005年、講談社学術文庫に2018年再刊)

大橋幸泰『検証 島原天草一揆』(吉川弘文館、2008年)

大橋幸泰「島原天草一揆は江戸時代をどのように方向付けたか」(『歴史研究』730、戎光祥出版、2025年)

#### 【付記】

・明日までに、Waseda Moodleにて講義記録の提出を求める。